令和七年度　推薦入学試験問題

国語

◎　指示があるまで開かないこと

北海道社会事業協会　帯広看護専門学校

問題一

「納得」に至る道は、くどい道である。なんにも知らない男がセーターを編めるようになるためには、やたらの数の「なにを→どうして」が必要になる。そのプロセス①のすべてを、「こうですよ」とズカイ[a]して教えなければ、身体というものは納得してくれない。つまり、「わかる」へ至るために必要なことは、自分の中に存在して眠っている「わからない」を、すべて掘り起こす作業だということである。

熊川哲也は、世界的に有名な超一流のバレエダンサーである。以前にたまたまテレビを見ていたら、彼の特集をやっていて、そこに子供時代の彼にバレエを教えていた先生が出て来た。北海道でバレエ教室を主宰する女の先生である。この彼女は、子供の頃の熊川哲也が、やたらと「わからない」を連発していたとショウゲン[b]していた。新しいプロセスを彼に教えようとすると、まだ中学生の熊川哲也は、「そんなことできねーよ、先生」と言うのだそうである。口で新しいプロセスを教えられても、「できない、わかんない」を連発して、「じゃ、先生やってみてよ」と言うのだそうである。熊川哲也が「できない」と思うことを先生がやって見せると、［　I　］、「わかんない」がまた始まるんだそうである。

バレエダンサーとは、身体を動かすのが商売である。だから先生は、「カクカクシカジカのように身体を動かせ」と言う。［　A　］言われた方の少年熊川哲也には、その「カクカクシカジカ」がわからない。全体としてそのようになるであろう動きの一々に、自分の身体のパーツがどのように対応しうるかが、口で言われただけではわからないのだろう。だから、実際に先生にやってもらう。目の前に出現した「新しい身体の動き」を見て、「なるほど、カクカクシカジカとはこのようなことか」と理解して、しかし、その動きを自分で再現するとなると、一々の［　II　］な動きがよくわからない。わからないのは、脳がその動きを概括的に「こうか」と認識しても、その認識が身体各部に対応したものになっていないからだろう。［　B　］、総論ではわかっても、各論では「わからない」のである。

「各論」という身体パーツに十分な理解が及ぶまで、「わからない」は連発される。「各論」の一々を「どうやらこういうものか？」と理解して、そしてその後になって、「総論」としての再構築が始まる。「わからない、わからない」を連発していた少年熊川哲也は、身体各部の動きを「どうやらこういうものらしい」と理解すると、家に帰ってそのことを我が身に実現させるためのレッスンに一人でハゲ[c]んでいたのだという。「前の日に〝わからない、わからない〟を連発して、しかし少年熊川哲也は、ヨクジツ[d]にはちゃんとできるようになっていた」と、彼の先生は往時[ア]を語っていた。

［　C　］、熊川哲也のすごさは、「次の日にはできるようになっていた」ではない。自分の理解の届かないところを確実に発見して、それに対して「わからない」を明確に確認していたこと――「わからないの掘り起こし」(1)である。

「わかるべきこととはいかなることか」を知るのは、「至るべきゴールの認識」である。それがわかれば、後は努力だけである。それがわかれば、一日でもできる。一日でできなければ二日、二日でだめなら三日。三日でも四日でも、「至るべきゴール」がどのようなものかを、明確かつ具体的にハアク[e]してしまえば、努力の結果は「達成」へと至る。しかし逆に、いかに努力をしようとも、「自分のなすべきことがどのようなことで、そのために自分のわかるべきことはどのようなことか」(2)を理解していない人は、自分の努力を空回りさせるだけになる。「努力を空回りさせたくない」と思う人間だけが、「わからない」の掘り起こしをするのである。

「わからない」を口にしたくない人間は、見栄っ張りの体裁[イ]屋である。「他人がやり、自分もやらなければいけないことなら、そんなにむずかしいことではないのだろう」と勘違いしてしまう。だから、「わからない」を探さない。それを探すのは「できない自分」を探すことになって、「できる」とは反対方向へ進むことだと考えてしまう。しかし、「できる」とは「できないの克服」なのである。「克服すべきこと」の数と内実を明確に知った方が、よりよい達成は訪[ウ]れる――その達成までの時間は、ある程度以上必要ではあろうけれど。

しかし、「［Ⅲ］」を探さずに「［Ⅳ］」ばかりを探したがる人に、その達成は訪れない。自分が「［Ⅴ］」と思うことだけをテキトーに拾い集めて、いかにも「それらしい」と思えるものを作り上げる ―― つまりその達成は、「似て非なるもの」へ至る達成」なのだ。

「わかる」とは、自分の外側にあるものを、自分の基準に合わせて、もう一度自分オリジナルな再構成をすることである。普通の場合、「わかる」の数は「わからない」の数よりもずっと少ない。だから「アンキ」[f]という促成ノウハウも生まれる。数少ない「わかる」で再構成をする方が、数多い「わからない」を掻き集めて再構成するよりもずっと手っ取り早いからである。手っ取り早くできて、しかしその達成は低い ―― ［Ⅵ］、達成へ至らない。「［Ⅵ］」というのは、いかにも事の本質を衝[エ]いた言葉で、「効率のよさ」と「効率の悪さ」は、実のところイコールでもあるようなものなのである。

（橋本治『「わからない」という方法』より）

設問一　傍線アからエの漢字を平仮名（ひらがな）に書き換えなさい。

設問二　傍線aからfの片仮名（カタカナ）を漢字に書き換えなさい。

設問三　［A］～［D］には、どんな接続詞（つなぎことば）が入るか。次の中から最も適当と思われる語を選び、それぞれ記号で答えなさい。ただし、同じ語は二度以上使わないこと。

ア　つまり　イ　しかし　ウ　あるいは　エ　もちろん

設問四　傍線①「プロセス」の意味として、次の中から最も適当と思われるものを選び、記号で答えなさい。

ア　結果　イ　原因　ウ　過程　エ　現象

設問五　［Ⅰ］には、どんな語句が入るか。次の中から最も適当と思われるものを選び、記号で答えなさい。

ア　耳をそばだてて　イ　首をかしげて　ウ　肩を落として　エ　腹を抱えて

設問六　［Ⅱ］に入る語句として最も適当と思われるものを、本文中から三字で書き抜きなさい。

設問七　傍線（1）について、「わからないの掘り起こし」は何のために行うのか。解答欄の「ため」に続くよう、最も適当な語句を、本文中から七字で書き抜きなさい。

設問八　傍線（2）について、このような人はなぜ「自分の努力を空回りさせるだけ」なのか。その理由を、本文中の語句を使って、三十字以内で書きなさい。

設問九　［Ⅲ］～［Ⅴ］に入る語句の組み合わせとして最も適当と思われるものを選び、記号で答えなさい。

ア　Ⅲ　わかる　Ⅳ　わからない　Ⅴ　わかる
イ　Ⅲ　わからない　Ⅳ　わかる　Ⅴ　わからない
ウ　Ⅲ　わかる　Ⅳ　わからない　Ⅴ　わからない
エ　Ⅲ　わからない　Ⅳ　わかる　Ⅴ　わかる

設問十　［Ⅵ］には、どんなことわざが入るか。次の中から最も適当と思われるものを選び、記号で答えなさい。

ア　石の上にも三年　イ　灯台下暗し　ウ　百聞は一見に如かず　エ　急がば回れ

問題二

生きものたちは多様であり、それぞれ、生きることに懸命なのですが、結局何をしているかと言えば、「いのちを続けていくこと」です。一つ一つの生きものが、時を紡ぎ、自分に与えられたいのちを次の世代へと渡してきたことで、三十八億年という長い間「生きものの世界」①が続いてきたのです。私たち人間も生きものとして生まれたのですから、どのように生きるかについては、連綿と続いてきた生きものの世界の中でこそ探っていくものなのではないでしょうか。時を追ってそのような気持が強くなっています。

ところで、私たちが生まれ落ちた現代文明社会には、生きものを見つめることから生き方を探るなどという考え方はみじんもありません。今ここにいる「私」が、欲望を満たし、今を楽しめるようにすることを目的として、そのために新しい技術を開発し、大量の人工物を作って自然離れした世界をつくることで、よりよい生活ができるというのが、現代社会を支える考え方です。もちろん「私」は大事ですが、それは多様な生きものの中で［　I　］を出すからこそ意味があるのであって、周囲を見つめない「私」は本当の私ではないでしょう。

今の社会では、生きものであることはソクバク[a]であり、死はマイナスそのもの、できればないものにしたいとされています。［　A　］、実際には私たちが生きものであることを止めるわけにはいきません。そこで、一見華やかに見える現代社会は、実はたくさんの問題を抱えています。地球環境問題は、次世代を代表してスウェーデンの少女グレタ・トゥンベリさんが「あなたは私たちの未来を盗んでいる」と指摘しました。過当な競争の中で疲れ果て、心が壊れる人も増えています。生きものをよく見つめ、そこから学びとったことを生かして「人間が生きものであること」を積極的に捉えた社会をつくる努力をすることは、これまでの進歩主義(1)から見ると消極的に見えるかもしれませんが、実はより暮らしやすい社会づくりにつながるはずです。［　B　］新しい挑戦であり、逃げではないのです。

生きものの眼で見ると、今の社会での生き方の問題が、自ずと浮き彫りになってきます。それらをショウカイ[b]したり、それに刺激されて私自身の生き方を考えたりした小さな文を集めてみませんかと言われて②生まれたのが本書です。私自身、集まったものを読み直し、一つ一つは日常的な事柄ですが、これからの生き方にとって大事なことに眼を向けたものになっていると思っています。大事なことに気づかせて下さった方がたくさんいらっしゃることが思い出され③、それを生かしていかなければならないという思いを強くしました。

生きものの面白さの一つは、変わっていくことです。昨日のあなたと今日のあなたは違っている。こうして赤ちゃんから始まっての子ども時代、おとなとして社会の中心となって生活を支えていく時代、少しずつ年齢を重ねた結果の老人としての時間など……それぞれの時がそれぞれに生きる意味を与えてくれます。子どもだから何もできないわけではありません。本文に登場する誰も手をつけなかったタネの会社をキギョウ[c]する中学三年生は、決して特別には見えない、普通の男の子であるところがとても［　II　］です。

実は生きものという眼で見ると、大事な言葉が「普通」になってくるということにサイキン[d]気づきました。今は競争を求め、一つの物指しで測った結果見えてくる数や量ですべてを示す社会ですから、「普通」という言葉が使いにくいのです。普通を示す数値があり、そこからはずれてはいけないという眼があるからです。

一方で、一つの物指しの中で上へ上へという上昇志向が強く、スポーツで言うならオリンピックのメダルがすばらしさの象徴(ウ)になります。もちろん百メートルを九秒台で走り抜けるワカモノ[e]の姿、サッカーでみごとなシュート④を決めた瞬間の選手などは見ているだけで気持ちよく、私もそれを大いに楽しみます。でも、メダルの数となると、国と国との競争が見えてきて、そうじゃないでしょうと言いたくなります。スポーツの基本は、普通の人が普通の生活の中で楽しむところにあり、その中ですばらしい能力をもつ仲間が選手として活躍することを楽しむものでしょう。スポーツ科学の専門家から苦しんでいる選手も多いと聞き、スポーツを愛する一人として、それ(3)は違うと

思います。

生きものの世界は、アリも普通ならライオンも普通。自分なりに生きている姿を示すのが普通であり、とても大切なことなのです。

生きものは本来、次の世代に生を渡して死ぬという形になっていますが、人間はコウシュウ[f]衛生、栄養向上、医療などいのちを支えるシステムをつくり、寿命を全[エ]うできる社会づくりをしてきました。人間という生きものは、年齢を重ねても普通の生き方が大事であり、本書に登場して下さる串田孫一さん、吉田秀和さんなどがすてきなおじいさんの姿を見せて下さったことの意味はますます大きくなっています。

（中村桂子『こどもの目をおとなの目に重ねて』より）

設問一　傍線アからエの漢字を平仮名（ひらがな）に書き換えなさい。

設問二　傍線aからfの片仮名（カタカナ）を漢字に書き換えなさい。

設問三　［A］、［B］には、それぞれどんな接続詞（つなぎことば）が入るか。その組み合わせとして、次の中から最も適当と思われるものを選び、記号で答えなさい。

ア　A　そこで　　B　つまり
イ　A　だから　　B　しかし
ウ　A　けれども　B　しかも
エ　A　しかも　　B　さらに

設問四　傍線①「連綿と」の意味として、次の中から最も適当と思われるものを選び、記号で答えなさい。

ア　壊さないように、大切にして
イ　入れ替わり立ち代わり、次々に
ウ　浮き沈みを繰り返しながら、ようやく
エ　途切れることなく、ずっと

設問五　傍線②、③の「れ」の文法的な用法は何か。次の中から最も適当と思われるものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア　尊敬　イ　自発　ウ　可能　エ　受身

設問六　傍線④について、「みごとな」の品詞名を書きなさい。

設問七　［Ⅰ］、［Ⅱ］には、どんな語句が入るか。次の中から最も適当と思われるものを選び、それぞれ記号で答えなさい。

Ⅰ　ア　独自性　イ　創造性　ウ　社会性　エ　画一性
Ⅱ　ア　不思議　イ　魅力的　ウ　大雑把　エ　現実的

設問八　傍線（1）について、「これまでの進歩主義」の説明に当たる一文を本文中から抜き出し、その最初の五字を書き抜きなさい。

設問九　傍線（2）について、「これからの生き方にとって大事なこと」とは何か。本文中の語句を使って、二十字以内で具体的に書きなさい。

設問十　傍線（3）「それ」の示す内容を、本文中の語句を使って二十字以内で書きなさい。